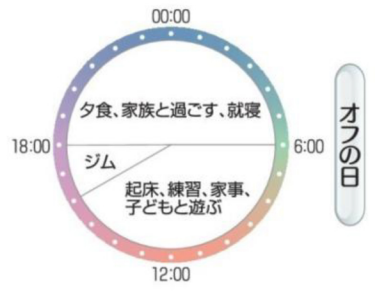
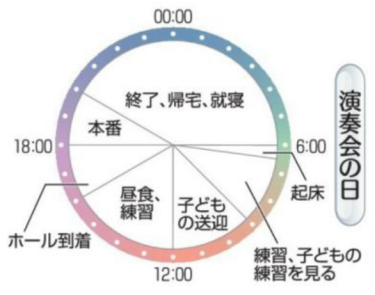


りんごの音符

22



ホルン奏者の父がドイツの楽団にいたので、3歳ごろまでドイツで育ちました。帰国してバイオリンを始めたのは5歳。目立ちたがり屋だったのでキラキラした音が魅力的でした。ただ練習は一生懸命やっていたわけではなく、中学2年生で桐朋女子高校の音楽科を受けると決めてから、練習や勉強に向かうようになり

バイオリン 猶井 悠樹さん (ドイツ生まれ)

高校で目覚めた音楽愛

当時僕と母が西宮市(兵庫)に住んでいて、桐朋で教えていた父が単身赴任をしていました。いままさに「自分が桐朋に行けば家族と一緒に暮らせる」と思ったのが受験を決めた一番の理由だったかもしれません。クラシック音楽に目覚めたのは高校です。授業でカラヤン指揮の「田園」を聴いたとき、すごく感動して

大学生のときに「小澤征爾音楽塾」に参加したことでオーケストラプレーヤーを目指すようになりました。初めて小澤さんに会ったとき、人を引き寄せるオーラや魅力がもの

習曲をサイトからダウンロードして弾いてみたり、昔のバイオニストについて調べたり、バイオリンの歴史にも詳しくなりました。基礎に目を向ける大切な機会になりました。

このことが見えて面白い。年々理想の音に近づいている気がするの、これからの自分に期待しています。(まごめ・秋村有香)

※次回は6月9日に掲載します。



猶井悠樹さん



アマチュアオーケストラの練習で代表する猶井さん(奥左から2人目)。奥右は「青い海と森の音楽祭」メンバーの横溝耕一さん=2025年9月

へなおい・ゆつき 1986年、ドイツ・ボン生まれ。桐朋女子高校音楽科、桐朋学園大学卒業。バイオリンを轉傳司・奥田章子、加藤知子、堀正文、ヘンリク・ホッホントラに、室内楽を徳水二男、毛利伯郎、原田植夫、東京クワルテット

らに師事。国内のコンクールで多数入賞。若い人のためのサイトウ・キネン室内楽勉強会、小澤征爾音楽塾や、東京・春・音楽祭、サイトウ・キネン・オーケストラなどに参加。2012年からNHK交響楽団第1バイオリン奏者。

作曲家はこんな人

チャイコフスキー

「涙の作曲家」と呼ばれるチャイコフスキー。その最大の理由は、音楽に込められた深い悲しみや感情の揺れが、聴く人の心を強く打つからだと言われています。ベートーヴェンのように動機を論理的に展開するのではな

く、美しい旋律を繰り返したり(反復)、転調によって高揚させたりする手法そのものがチャイコフスキーの音楽の最大の特徴です。また、チャイコフスキーは、自身の人生の孤独や苦悩、愛と喪失の感情

を、そのまま音楽に刻み込みました。だからこそ、聴く人も「これは私のことだ」と感じてしまうのでしょう。感情を隠さず、むしろさらけ出す、それがチャイコフスキーの音楽の美しさであり、聴き手が涙する理由なのかもしれません。チャイコフスキーの旋律はまるで魔法使いのように、音階を上下に動かすだけのシンプルな構造でも、心が浮き

立ち、沈み、涙が溢れるほどの感情を呼び起こします。それは、旋律の美しさ、感情の深さ、オーケストレーションの巧みさ、さらにバレエとの融合といったいくつもの要素が絶妙に重なりあっているからで、これらのことが「分かりやすい美しさ」や「涙を誘う旋律」に結びついているのではないのでしょうか。チャイコフスキーの音楽の特徴のひ

とつは「一度聴いたら忘れられないメロディー」です。また、クラシック音楽は通常、動機を複雑に展開させますが、チャイコフスキーは「ここが一番聴かせたいところ！」という、現代でいう「サビ」を明確に作り出しました。『白鳥の湖』や『くるみ割り人形』、ピアノ協奏曲第1番など、誰もが口ずさめるフレーズと、そのセンスがとても魅力的です。(具吹奏楽連盟監修)

2026年10月31日～11月8日に第2回「青い海と森の音楽祭」が開かれます

無断での複製・転載・生成AI利用を禁じます。